玉門關の如きも此頃始めて成れるより推せば、蘭州より玉門關附近に亘る長柵（後漢の蔡邕の言に秦長城を築くとあり）は恐くは此時代に成れるものならん。東漢の揚武將軍馬成は障塞を繕治して、西河（黃河と謂ふ）より渭橋（長安の東北）河上（黃河附近なる今詳ならず）より安邑（山西省解州府安邑縣）太原（山西省）より井陘（直隸省）中山（直隸省正定府附近）より鄴（河南省彰德府鹽漳縣）に至る間に堡壁を築き、烽燧を起し、十清里毎に一候を置きたりき。

南北朝の時代に及び、北魏の明元帝の泰常五年（紀元四百十三年）には赤城（未詳）より五原（榆林附近）まで二千餘里の長城を築き、太武帝の太平眞君七年（四百四十六年）民十餘萬人を發して上谷（直隸省保定府の西方）より黃河に至る延長千里の長城を築けり。北齊の文宣帝天保三年（五百五十二年）永寧（今の山西省汾州府の內）の西北黃櫨嶺より北方の社平戍（朔平府の內）まで四百餘里間の長城を築きて、三十六戍を置き、同六年（五百五十五年）民百八十萬を發して幽州夏口（直隸省永平府附近今之を南口と云ふ）より恒州（同省正定府附近）に至る九百餘里の城壁を築かしめ、翌年西河の總秦戍（大同府の西北）より東海に至る長城を築きたり。前後延長三千餘里なりと云ふ。次で周の宣帝の大象元年（五百七十九年）には、山東の人民を發して長城を修築し、亭障を建て、西は雁門（山西省代州附近）より、東は碣石（未詳）に至れり。